日高開發史

第一編　開發前史

一　概　説

日高地方は幌尻岳（二〇五二米）を主峰とする日高山脈の西南斜面を流れる各河川の流域と、沙流川口より襟裳岬を経て日勝国境に至る百二十粁の海岸線から形成されている。表日本の特色として、空のよくはれた日が多く気候も温和であり、特に雪は少なくまことに日高の国名にふさわしい。

ここに展開された人間活動の歴史は、新石器時代の縄文式土器にはじまり、やゝ進んで金石併用時代のものといわれる擦文式土器が各地から発見されているが、系統的な研究は今後にまたなくてはならない。

民間伝承については夙にジョン・バチエラーや、金田一京助博士その他によつて資料が採収され、世に知られているが、これらは所謂沙流人（サルンクル）を主としたものであつて、染退川以東の東人（メナシクル）については必ずしも明らかにされているとは云えない。ただ土俗学上染退川を界として、一は十勝系、他は日本海系のものであるとの説が有力であることを附記しておく。

アイヌの生活舞台としての日高をみるに、㈠雪少なく気候概ね温和であること、㈡各山間渓流の地は快適な小天地をなしていること、㈢雪を避けて群集する鹿の越冬場所であることなど、きわめて好条件を具えている。したがつて日高はアイヌの古都といわれ、アイヌ文化のもつとも円熟したところとされている。しかし天然資源だけに依存したコタン（部落）は自から活動範囲に限度があつて、一部落は百戸以下にとどまり、国家的組織をもつたことはない。ただ他部族とは団結して争闘した例はあり、殊に十勝アイヌとの争闘については多くの口碑が残されている。

はじめアイヌは進んで本州に交易におもむき、和人から各種の物品を入手した。就中金属器の移入は彼等のもつとも要望したもので、これによつて急速に土器時代から金属時代にすすんだのであるが、和人が渡来したころでも、一部には石器時代の生活をしていたものがあつたことが記録されている。

東北の武士が渡島に割拠したころは、アイヌの勢力は甚だつよく、屢々その攻撃を受けて困難をきわめた。しかし一方交易もさかんに行われ、和人文化の浸透は目ざましいものがあつた。和人は交易に来るアイヌをまつだけではなく、進んで蝦夷地に赴いて交易地の開拓につとめた。文禄五年松前氏がその臣下に知行として、これら各場所を区分配当するや、交易生産の体制ははじめてその緒についた。かくて従来自然人として自給自足の生活をしていたアイヌは、交易品の生産に立ちはたらき、和人経営の場所に雇傭されることとなつて、その生活は次第に向上したが、民族伝統の風習や雄大の精神はようやく消磨して、日本経済の一環につらなる単なる労働者となる傾向を生ずるに至つた。

一六〇〇年代になると、蝦夷の各地に採金の業が盛んになつた。黄金が人間を未開地に吸引する力の絶大なことは世界史にその例が多いが、日高の開発についても矢張り例外ではなかつた。蝦夷の黄金をもとめて山間へき地にも数百名の坑夫が入稼し、日高の各地には意外な景気が湧き起つた。寛文九年所謂シャクシャインの争乱は、もとより系統を異にするアイヌ部族の反目に原因してはいるが、採金坑夫がこの間に介在して事態を悪化したことはいなみ難い。この大乱は辛くも鎮定し得たが、採金夫の入稼はその後禁止され、アイヌとの親和には格段の努力がはらわれるようになつた。松前藩のとつた方針は概ね温情主義であつたが必ずしも文化的であつたとは云い得ない。

宝暦一〇年(一七六〇)、露人が南下して北千島を占拠したとの警報が達してから、北辺の風雲は俄かに急を告げるに至つた。よつて幕府は北方の護りはこれを一松前藩に委するに忍びず、寛政十一年(一七九七)より日高以東の地を直接支配することとした。即ち箱館に奉行を派し、有力な幕僚は沿岸を巡視して経営の策をねりまた南部藩兵は日高の守備に任じた。最初に行われたのは、東部に通ずる軍道の開通であつて、近藤重蔵等の努力によつて、一応これは美事に完成した。そしてこれはとりもなおさず日高開発の第一の礎石と称すべきものであつた。さらに御用達高田屋嘉兵衛は昆布の消流について新生面をひらき、幌満の造船所からは大型船十余隻の進水を見ることとなつた。各会所には農作物の試作や、養蚕が行われ、また元浦河牧場が開設されるに至つた。様似には官寺等淵院が建立され、宗門取締と共に辺境居住者の精神的支柱となつた。この頃すでに幌泉には和人の定住者が認められるのであるが、初代秀暁は名僧のほまれ高く、日高の先駆的教化者でもあつた。また伊能忠敬は、当時北辺の急を察して蝦夷地の測量をこころざし、寛政十二年、自から克明に歩測し、天度をはかりつゝ日高の海岸を過ぎていつた。

文政四年(一八二一)より安政元年(一八五四)に至る間、一時再び松前藩政に復したが、諸事守成のみに終始停滞した。安政二年より改めて奉行庁下に属したが、僅か十数年で明治維新をむかえるに至つた。日高各地は様似に在勤する調役に統轄され、沙流、静内、様似、幌泉には調役下役が駐在した。この間奉行は外交の事に忙殺されて、日高の開発に意を用いる暇もなかつたが、山田文右衛門が沙流の海浜に投石して昆布礁を造成したことは日高開発史上特筆さるべき事柄であつた。安政二年には松浦武四郎が、各コタンの酋長を案内人として日高の各地を跋渉し、詳しく山川の形勢を取調べた。これによつて伊能氏の海岸線の中に、内陸の地勢は一応明らかに描き出されることになつた。松浦はまた詳細な地誌を上梓したが、詳密にして興味溢るる記述は、その後公にされた多くの類書の追随をゆるさぬものであつた。

日高の天地に、和人が入り込んで来て経営に従つてからここに至るまで凡そ三〇〇年、微々たるものではあつたが開発向上の道を辿つたといつてよい。しかしながら鎖国封建制下の開発工作には自から限度があり、飛躍的発展は明治以降の組織的施策にまたなければならなかつた。

一　遺物と口碑

一　沙流川下流の遺跡

富川町のビダルバ及び川東墓地の丘陵端から土器石器の出土がある。何れも黒土層下にあつて薄手縄文或はそれに擦文を加味したもので、文様も多分に技巧的である。

福満に至る台地上において発見された一遺跡は、地表下一米の火山灰及び風化した赤土の下にあつて、極めてそまつな厚手縄文式の土器を出し、この地方の最も古い先住民族の遺物と考えられる。この近くにはまた数群の竪穴遺跡がある。火山灰層の畑地の上に黒い円形を示し、作物はその部分だけ特に出来が悪い。発掘の必要があるが、表面採取においては土石器を出さず、多くの鹿の骨、歯、貝がら等が散在し、穴あき銭を拾つたことがあるともいゝ、銅製の鏃も出土しているところよりみれば、恐らく近世のものであらう。別の箇所においてはおびただしい鹿骨の散在がみられ、ここでは円形の黒土層(たて穴中に堆積した腐植質)はみられず、若干の鉄片をだし、鹿骨のあるものは、大きなあご骨の中に歯がのこり、その色沢もさまで古くはない。恐らく百年を出ない比較的新しい時代の居住地ではないかと推定される。この附近の古地名をイタタウス即ち割截するところ(鹿肉を)ということからして、狩猟者のあとであろう。

沙流川口に近い富浜の肥沃地には多少の貝がら、鉄鍋片、小刀、斧、船釘などが散在しているところがあるが、近代アイヌの残したものか或は寛政十二年八王子屯田営農のあとであるかもしれない。

チャシは富川町東のビダルバの丘端にあるといわれるがその形は判然しない。富川台地の丘端にあるものは、小方形の環濠が明瞭